かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

東礼拝場南側（防火用水）

おつとめ奉仕者の増員

・一人ひとりが日々に真実を尽す
・布教によるおつとめ奉仕者の増加
・各種講習会への参加による奉仕者の増加
・おぢばへの伏せ込みひのきしん

立教171年
12月号

秋季大祭講話

よふぼくとしての常々の心得

世話人　島村廣義 先生

一、ひながたに学ぶこと

秋の大祭は、立教の元一日を祈念し、おぢばの大祭の理を戴いて、それぞれの教会でも大祭としてつとめるお祭りです。

立教の元一日、今から遡ること百七十一年前、当時の中山家の主なる方が立て合って身上にしるしを見せられ、たすかりたいという思いから寄加持をされたときに、加持台をつとめられた教祖のお口を通して、初めて親神様のお言葉が下がります。

我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。

教典・御伝の冒頭に記されているこのお言葉こそ、お道たる由縁を説き明かされたものです。お道の全てがこのお言葉に凝縮されています。

親神様は、人間・この世を創造められるときの約束に基づき、人間を宿し込まれたぢばで、宿し込みの子数の年限を待ちかねて、母親の役をつとめられた教祖をやしろに、初めてただ今のお言葉を下さいます。

その由縁は、神人共に陽気ぐらしを楽しみたいというをやのお心でした。

たすけてもらいたいという中山家の人々の願いに対して、たすけるたすけないではなく、神のやしろに貰い受けたいというお言葉が下がります。

当時の中山家の事情から思案すると、その話は到底受け入れられるものではなく、再三手を尽くして断わられますが、親神様の方とすれば、人間・この世を創造められた約束事に基づいてのお言葉ですから、これを撤回するわけにはいかない。

三日三晩の押し問答の末、夫・善兵衛様は、あらゆる人間思案を絶ち一身一家の都合を捨てて、仰せに従う旨を答えられる。これがこのお道の始まりの事情です。これがたすけ一条の五十年にわたるひながたの一番最初です。

ひながたは、立教の元一日の特別な事柄ではなく、教祖が示された私たちの信仰上の手本ですから、これをどのように心に治めるのかというと、それぞれの入信の元一日に置き換えてこれを思案することが大切だと申したいのです。

私達の入信の元一日、いろいろ身上・事情におしるしを頂き、それを手引きとしてお引き出しいただいたお互いですが、それは、親神様が私たちをたすけ一条の道具・よふぼくとして使いたいと思し召して引き出されているということを、私はこのひながたの冒頭に学ぶわけです。

立教の元一日を思案すると、それぞれがお道にお引き寄せいただき今日まで結構にお連れ通りくださる親神様・教祖のお心にお応えするご恩報じの道をしっかり心定めて通ることが、何よりも大切だと思います。

後継者講習会の折に、真柱様はこのことに触れられ、忘れてならないのは、入信の動機に加えて、その時の心定めは何で、どの様に実行されたのか、今はどうか、ということを知るということは、非常に重要な事柄だと仰いました。

一、人間の存在意義を心得ること

教祖は、月日のやしろにお定まりになり、親神様の教えを口で説き、筆に記して教えられたばかりでなく、親神様の御教えを実践して、人間が心一つでこの世で陽気ぐらしができる、ひながたの道を残されました。これは偏に子供可愛いたすけ一条の親心からです。

私たちはこの教祖のひながたの道をお教えいた

だき知っているのですから、そのひながたの道をひながた通りに素直に通って、陽気ぐらしの足取りを進めていかねばなりません。

教祖は、学問にない古い九億九万六千年間のことを世界へ教えたいと仰せられて、元の理を始め、人間創造の元の始まりのお話を教えられました。

このお話の中で、親神様が人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思し召めされてこの世と人間を創造られたこと、つまり、人間の存在理由が陽気ぐらしをすることだという大切な教えの根本を教えられています。

一、報恩感謝の心を培うこと

人間創造に当たって親神様は並々ならぬご苦心で人間を創造られました。

親神様が泥海中を見澄まされ、道具衆を引き寄せられ、承知をさせて貰い受け、食べて心味わいをお試しになり、その性分をお見定めになって、それぞれの役割をお与えになりました。役割を与えられた道具衆の方々は、人間創造という親神様の目的に一つになって、与えられた立場・持ち場で、自分の徳分を精一杯に尽くしきられて、そこに人間が誕生します。

親神様の人間創造の段取り、そして、生みおろされるご苦心、天地を固め、世界を作り、立毛をはじめ、身の内の養いとなる万一切を与えられるお心づくし、私たちが日々結構にくらしているのは、みな天地抱き合わせの親神様の懐に抱かれて、温かい親心に守られているからです。

この元始まりのお話の中にお教えいただく親神様の十全のご守護の理を心に治められれば、親神様のご守護でもって、眼でものを見分け、耳で理を聞き分け、鼻でものを嗅ぎ、口で噛み分け、足で運び、心の思うままに自由を叶わしてもらうことができます。親神様のご守護をしっかり心に治めて、日々感謝と喜びからなる報恩の心で通らねばなりません。

人間の身体は親神様によって創造られたもの、親神様より貸し与えられたものです。身体は親神様よりのかりもので、心だけが自分のものだとお教えいただき、おふでさきに、

めへ〳〵のみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん　三号137

かしもの・かりものの理が分からなければ何も分からないと仰せになっています。

別の言い方、見方をすると、これさえ分かったら後は皆分かってくる、と悟れます。

このかしもの・かりものの理が分かれば親神様のご存在はもとより、親神様のご守護、人間の生きる目的、その生き方など、教えの全てが分かってくると仰います。

一、日々にほこりを払うこと

心の使いよう一つで人間は陽気ぐらしをすることができるとありますが、心一つで陽気ぐらしをするにはどうすればいいのか、

一れつにあしきとゆうてないけれど
一寸のほこりがついたゆへなり　一号53

病気や不治や災難・難儀不自由のもとは心のほこりだと教えられ、親神様の教えを定規として早めに間違った心を改められれば、心は鮮やかとなり、身はすきやかに治まると教えられます。

このほこりの心遣いを掃除するよすがとして八つのほこりを教えられ、更に、うそとついしょこれきらいと諌められて、日々にほこりを払うように教えられています。

「あしきをはらうて」のお歌に込められる親神様の思召をよく心に治め、日々に、親神様の前で自らの心のあり方を振り返り、ほこりを払う努力を真剣に積み重ねることが大切です。

心のほこりを払い、心が澄み切れば陽気ぐらしができます。

身の内かしものや、かりものや、心通り皆世界に映してある。世の処何遍も生れ更わり出更わり、心通り皆映してある。（明21・1・8）

とお教えいただきます。

自分の身体・身のまわりに現れてくる姿に、己

のこれまでの心の足跡を振り返り、教えをもとに自らの心の向きを正しく変えながら、陽気ぐらしへの心作りを進めます。

一、人をたすける心を培うこと

世界中の人間は、みな、親神様に創造られた親神様の子供で、兄弟姉妹です。兄弟姉妹なら兄弟姉妹らしくたすけ合いをしてくれと求められています。

夫婦・親子・兄弟姉妹、また、親神様より結んでいただいた人間関係など、先ずは身近なところからたすけ合いをすることが第一で、更には、病む人に対しては、すすんでおさづけの取り次ぎに励むことです。

お互いは、九席の別席順序を運び、親神様のお話を聞き、その澄み切った心におさづけの理を頂戴したよふぼくです。

日々常々尽くす運ぶ誠一つに親神様よりたすけ一条のためにこうのうの理として授けられるおさづけには、世界中の人間をたすけあげたいという教祖の熱い思いが込められています。

これを心に刻み、教祖にお喜び頂けるようすんでおさづけの取り次ぎに励まねばなりません。

身上を病む人におさづけを取り次ぎ、親神様のご守護を頂戴してもらう、その人の解き開かれた心に、親神様の思召を伝えて、本当にたすかっていただくのです。

事情に悩む人には、親神様のお話を取り次いで、閉ざされた心を開き、真のたすかりに浴してもらうのです。

一、ぢばにつくしはこぶこと

そのためには、親神様のご守護を頂かねばなりませんが、そのご守護いただく根本は、おたすけする者とおたすけを願われる方とが、ぢばに真実を尽くしぢばに真実を運ぶことです。

ぢばは親神様が人間を創造められた場所・人間の命の源です。そのぢばに親神天理王命の神名を授けられ、親神様がお鎮まりになっています。ぢばは親神様のご守護の源です。

さらに世界中の人間を宿し込まれた証拠として据えられたかんろだいを芯に、選ばれた十人のつとめ人衆が、人間創造の時の親神様のおはたらきの理を手振りに現わしておつとめをつとめるところ、そのおつとめによって、人間世界を創造られた親神様のおはたらきを再びこの世に現わされ、今までにない珍しいたすけを現わして世界一れつをたすけあげると教えられます。

ですから、ぢばは救済の源です。人間の命の源、親神様のご守護の源、たすけの源であるこのぢばに、真実を尽くし真実を運ぶことが、親神様の自由自在のご守護を頂く道だと教えられています。

一、教え通りにおつとめをつとめること

さらに、それぞれの教会でつとめるおつとめは、ぢばでつとめられるかぐらづとめの理を戴いて、大祭も月次祭もぢばでお許しを頂いた日につとめるので、それぞれの教会のおつとめが世界だすけのたすけづとめに繋がります。

このことをよく思案して、私達お互いは、それぞれ教会のおつとめを教え通りに心明るく勇んでつとめねばなりません。

教会のおつとめをつとめる者が、世界だすけのご用をつとめているという自覚と誇りを持って、難儀苦労している人々のためにお願いをする、親神様のご守護を祈念することが大切なのです。

難儀苦労をしている人々をたすけたいと願っても、それぞれが直接手を差し伸べることは簡単ではありませんが、おつとめによってお願いする、難渋たすけを祈念することはできます。これが世界だすけの実現に繋がっていく道です。

一、素直な心になること

親神様はこのよふぼくをお使いになって世界だ

すけをすすめられますが、私達よふぼく一人ひとりがこのことをしっかり心に定めて、世界だすけに心勇んでつとめることを、親神様はお望みになっています。

よふぼくお互いは、常に胸の掃除に励み、心を澄まし、親神様に入り込んでいただけるよう、常々成人の道を歩まなねばなりません。

あちらの国からよふぼく、こちらの国からもよふぼく、……どんなよふぼく寄せてどんな仕事するやら分からん。小さい心はやめてくれ。

（明28・10・7）

と仰せられています。親神様は、世界から、いろんな国から、いろんな人をよふぼくとしてお引き寄せになり、そのよふぼくの心に入り込んで、世界だすけをすすめられます。

二代真柱様は、よふぼくは教祖の道具衆だと教えられました。私達よふぼくは教祖の世界だすけのご用をつとめる道具衆です。教祖に使っていただきやすい素直な心になること、人をたすける心で勇んでつとめねばならないと思います。

一、自ら求めて心を定めること

お互いに立場は違います。道一条の方もおられましょうし、土地処でいろんなつとめを持っておられる方もありましょう。老若男女それぞれが自分の与えられた立場で、教祖の御教えを実行し、人様に喜んでもらい、たすかってもらえるよふぼくとしてのつとめを、共々に心勇んでつとめ励みたいと思う次第です。

立教の元一日に思いを馳せ、それぞれの入信の元一日から思案して、今日の自分の今ある立場を、結構をしっかり心に治め、要は立教の元一日、人間始め出しの元一日の親神様のお心に応えるよう心定めて通ること、これが秋の大祭をつとめる私達の心です。

御参拝をした機会に、この大祭の意義をお話し申し、また、笠岡大教会は創立百二十周年のお打ち出しがありましたが、この仕切りも、つとめねばならないからつとめるのではなく、自らが求めてその仕切りを作り、仕切り根性を持って少しでも思召にお応えできるような、成人をしたいというその心が表れたもの、これが私は記念祭をつとめる意義だと思います。

それで、元一日に立ち返り、しっかりそのことを思案すると共に、これからの先行きをしっかり心定めて出発したいと思います。

《以上要約》

修養科生の声

山の辺の 家族揃って 修養科

稲富士分教会　須毛田　充　教

母や兄たちが熱心な信者なのに、天理教から逃げ回っていた私に、この度、親神様からお手引きを頂いたのは、もともと計算されつくされていた当然の事だったようでした。

若い頃、東京で多くの飲食店で修業を重ね地元広島で「チアス(陽気の意)」と言うカフェを家族などの協力で開店させて頂きました。コンサートを催すなど文化を発信する店として、話題になり好スタートの出発でした。しかし、17年目、私の身勝手なやり方と「８つのほこり」が積り積ってこれまでの人生で経験したことのない、つらい大事件が連続に二度も起こったので、兄・教会の方全員一致で修養科志願の話が進んでいました。ところが、それでも私はまだ迷っていました。

その頃「こどもおぢばがえり」に６年生と４年生の子供を連れておいっ子のメンバーに参加した時の事でした。ちびっ子のイベントで盛上っていたので、軽い気持ちで「天理小に行って三ヶ月転校できるか聞いてみよう。」と稲富士の会長さんと職員室を訪れるやいなや、中島教頭先生の情熱と人柄に一目惚れし、子供を連れて修養科を約束し、その場で全ての入学手続が完了しました。今思えば文字通り神技的タイミングでした。子供らは野球チームのレギュラーで引退試合や楽しみにしていた全ての公式試合を犠牲にしてまで親の立場を理解して付いて来てくれたこともおやさまのお導きであったのです。

８月25日から三ヶ月間のおぢばの大切な生活、心配していた学校での友人関係や勉強は、たかし君をはじめ上原先生のお子様たちのお陰で初日から楽しく登校でき、秋の遠足や運動会にも参加させて頂きまた休みは詰所の前の小川で魚つりをしたり、武内さんご夫婦のつくってくださったうどんやラーメンを幼いいづみちゃんらと一緒に食べたり谷内先生をはじめ詰所の先生方や修養科生の人たちにいつも遊んでもらったり叱ってもらったりして「詰所に引越ししたい」とよく話しています。

その反面、私は顔にこそ出しませんでしたが過去の後悔、将来の不安、妻の身上、お金もない、何もかもが悩みで、美しい花々もぼやけてしか見えないほどつらいおぢばでの２ヶ月でした。

ところが、心定めをした秋の大祭のすぐ後、不思議ですが、胸の中を久しぶりに爽やかな風が吹き、神殿の後ろに帯の様に広がる「山の辺の道」の山々やおつとめのうたごえが鮮明にきこえ、心は澄み、勇み心もわいてきました。神様にもたれ「節から芽がでる」を信じ物事に当っていたからでしょうか。あるいは、子供たちの陰の力かもしれません。このご恩を決して忘れないよう”神一条の精神“を貫く決意をさせて頂きました。

秋晴れの朝、神殿から幾百人という天理の生徒たちが参拝を終えてぞろぞろと階段を降りてきています。初めて見たこの光景にしばしたたづみ天理教のすばらしさ、真実の壮大さに感激の涙があふれてきました。その子供の群衆に見つけた我が子に別の涙をこぼしながら『立派なようぼくとなって人様の役にたってくれ』と願いながら、これを生涯の私の夢にしようと親神様に誓いました。

特に理由があった訳でもなく

新山邑分教会　三島　まさよ

「行くなら、早いうちに。」と、軽い気持ちで九月から修養科に来て早いもので二ヶ月が過ぎました。

この二ヶ月を振り返ってみると、私はたくさんの事を学ばせていただきました。なかでも一番が、当たり前の事など一つも無いと言う事です。私は小さい頃に左の腎臓を取るという身上をいただきました。にも関わらず、それ以来後遺症一つなく風邪もあまりひかず元気に過ごしていたので、自分の中でいつしか元気で当たり前という考えになってしまい少し動いただけですぐに疲れたなどと、口を開けば不足・不足・不足と不足ばかりでした。

それが、このたびの修養科にきて同じ笠岡の修養科生さんから、自分と同じ組に一、二年ほど前まで現役で仕事をしていたのに、突然原因不明の病気になり、徐々に身体の筋力がおち今では車いす生活で一人では何も出来なくなってしまった人が奥さんと一緒に修養科に来ているという事、その人がある日奥さんにむかって「俺は見せ物じゃねぇー。」と、言っていたと聞かせてもらいました。

この話を聞いて、腎臓を取るという身上を頂いておきながら、健康で元気で当たり前と考えていた自分が情けなくなりました。自分で立ったり、座ったり、歩いたり、走ったりしたくても出来ない人がいるのに、私はありがたい事に何でも自分一人で出来、そのうえ身体を動かせば動かしただけ疲れを感じさせて頂く事が出来る。その事が、どれだけありがたい事なのかを改めて考え直す事が来、こうして元気に身体を動かさせて頂ける事に感謝して、日々喜び勇んで務めさせていただきたいと思うようになりました。

最後に、軽い気持ちで修養科にきた私でしたが、今この時だったからこそ、この修養科生の人達だったからこそ自分自身の考えの甘さや、つなぐ気持ち、底い心が足りないのだという事にも気づかされ、直していこうと思えたのだと思います。

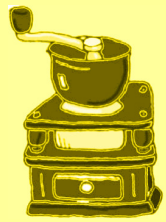
このおぢばで過ごす修養科生活も残りわずかになってきました。残された日々、少しでも成人できるように又、修養科生活が終っても修養科で学んだ事、経験した事を忘れないようにしていきたいと思います。

笠岡五人衆四小間劇場

第三回「通りすがりの鼬」

つづく

談話室



野球大会に想う

福満分教会長　福島大介

「勝ったなァええが、明日メンバー揃うんか？」

十月二十八日夕暮れ時、笠岡詰所の一室で、平盛監督がぼやく。初戦をほぼベストメンバーで挑んだが、次の三回戦は、仕事などの都合で帰らなければならない選手がいる。万が一、十人の頭数が揃わなければ、棄権・不戦敗となり、場合によっては来年の大会(岡山大会予選を含む)の出場権すら剥奪されかねないのだ。監督がぼやくのも尤もである。

ところが、当日「帰る」と言っていた選手が、チームの為に、自分の都合を捨てて残ってくれた。結果、三回戦で敗れはしたが、立派に戦い終える事が出来たのである。

さて、私は時折信者さんに、教会の月次祭を野球に例えて話すことがある。

「手をどり・地方・男鳴物・女鳴物、全てが揃わなければ、御教え通りのおつとめではない。どれか一つ欠けてもいけない。野球で言えば、棄権・コールドゲームつまり7対0で負けということになる。『今月はちょっと他に用があるから参拝できません』『私がおらんでも他の人がおるじゃろう』ではなく、『私が一人欠けても試合が出来ないんだ』『おつとめが勤められないんだ』というくらいの精神で月次祭を迎えて下さい・・・。」と。お陰様で我が教会には、毎試合補欠が控えて下さっているが、それもこれも、九十代選手や八十代選手が、現役で元気に勤めて下さっているからだ。

私は今四十七歳。年々若返るチームの中では、監督を除くと最年長である。華麗なる守備は加齢だけが進み、打球を追いかけるが、あっさり頭上を抜かれ、ついでに髪の毛も抜け落ちてゆくのである。それでもまだ、負けると悔しさがある。もっと強いチームになって、いつか優勝したいと願っている。だから、三日間、仕事があろうと、何があろうと、野球のためにおぢばに残れる方。お待ちしてます。経験者優遇しますので、よろしく。

野球大会

芦常分教会　原啓道

去る、10月28日より、全教野球大会が、おぢばで開催されました。我が笠岡ワールドブラザースも厳しい岡山地区予選を勝ち抜いて、出場したことは皆様ご存知のことかと思います？ 笠岡につながる皆様にこの紙面をお借りいたしまして、結果を簡単に、お伝えしたいと思います。

第1回戦前に神殿にて無事に楽しんで元気にプレー出来ますよう参拝し心新たに白川会場に向かいました。初戦、笠岡vs熊本大。熊本大は開会式には明らかに詰所関係・修養科の方？と思わしき人々が参加していたのですが、試合になると若き青年がおおいにいるではないですか？ 不安な心持ちで試合開始となりました。後攻、笠岡は先発三代(弟)が一回表を無難に抑え上々の立ち上がり。1回裏笠岡の攻撃、1番キャッチャー村川四球で出塁。すかさず2盗、相手の隙をついて3盗。相手キャッチャーが3塁へ送球ミスの間にホームインにて先制点。1対0。3回裏、8番上原繁の内安打すかさず2盗、続く9番原は、進塁打1アウト

三塁のチャンス。1番村川倒れ2アウトになるも、2番田中伊の2Hヒットで追加点。2対0。4回表、ピッチャー交代、岡。2アウト簡単に取るも四球でリズム崩れ押し出しで1点献上。その後は抑え、4回裏の攻撃、残念ながら無得点。5回表ピッチャー北川へ交代、2点追加されピッチャー再び三代に交代。後続を抑え5回の裏の攻撃へ・・、無得点。6回の攻撃に移る際、時間制限にて最終回のコール。この時点で3対2、笠岡1点ビハインド。なんとしても、6回の攻撃を無得点に抑え反撃したい笠岡は、6回表を無得点で抑え逆転を願い最終回へ突入。6回裏、相手ピッチャーは1回から投げ続け疲労の影が見え始め四球の連続・満塁のチャンスで連続四球にて、我が笠岡チームはサヨナラ押し出しフォアボールで、逆転勝利。熊本3対笠岡4にて、見事1回戦突破。相手ピッチャーにも賞賛しつつ2回戦へ向かいました。なおこの試合には大教会長様をはじめ修養科主任・助員先生・修養科の皆様、事務所の方々の沢山の応援をいただき監督・選手一同大きな力をいただきました、ありがとうございました。終了後、詰所に戻り大教会長様より豪華差し入れを頂戴し慰労会を行わせて頂きました。ごちそうさまでした。皆、疲れからか慰労会終了後、入浴しすぐ寝るという有様でした。

明朝は朝八時からの試合開始でした。二戦目は強豪・愛知大教会。見るからに野球選手の体をした青年がズラリと並び、準備体操・ランニングの時点で違いを見せつけられましたが、やってみなければ分からない，一矢報いてやろう？という気合いで開始となりました。笠岡先行で一回表、前日から好調の上原繁がセンター前Hで出塁するも得点には結ばず○点。先発は連投の三代(弟)一回裏を上々の立ち上がりで無得点に抑える。二回こちらも好調田中伊がライト前Hで出塁するもこの回も無得点。二回裏、愛知の攻撃。四球や長短打で五点を献上す、五―○笠岡五点のビハインド三回表、上原繁。体を張った死球で出塁、続く三代は投手エラーで出塁、四番北川も死球で一時満塁としチャンスをつかむも後続倒れ無得点。四回表、田中隆の三遊間を破る痛烈なヒット一所懸命に一塁まで全力疾走！！ベンチでは「ライト前なら完全アウトやな・・・。」が、無得点。四回裏ピッチャー村川に交代無得点に抑え五―○。以前、ホームベースが遠い笠岡は、五回表にチャンス到来。三番三代が死球で出塁すると、ここまでヒットのなかった眠れる大砲四番北川が、ライト線を破る起死回生の三塁打、一点を返す。その後、愛知の好機に五回六回と一点ずつ追加され終わって見れば、七対一で敗戦。戦う前はコールドもあるかもと不安がよぎりましたがチーム力を合わせ一矢報いたかなと言う勝手な想いです。

負けはしましたが、無事、健康な体で元気にプレー出来たことが何よりで勝負に関わらずお互い楽しくお道の仲間として野球が出来たことに感謝致します。なお、大教会長様をはじめ、全教野球の為にご尽力下された、本部関係者の皆様、詰所で受け入れをして下さった詰所主任先生・事務所・修養科の先生方・修養科生の皆様にこの場をお借りし御礼を申し上げます。ありがとうございました。来年も岡山予選を勝ち抜きおぢばで、元気にプレーしたいと思っております。

笠岡ワールドブラザースは、上原志郎先生をはじめ個性豊かなメンバーで活動しています、野球経験に関わらず元気で明るい方を求めていますので是非一緒に楽しみましょう。そして、お互いお道の仲間として絆を深めていきましょう。

青年会ひのきしん隊に参加して

明石市分教会　杉原栄司

この度、10月1日より24日まで、第739回隊おやさとふしん青年会ひのきしん隊（以下、ひのきしん隊）に初めて参加させてもらいました。

濃厚な24日間でした。選択修練、講話、においがけ、月次祭まなび、感話大会などもありますが、まず、朝起床4時55分！家だと確実に夢の中です。それでも毎朝寝坊せず起きれたのは、起床の時間になると流れてくるあの今でも耳から離れないおぞましい音楽のおかげです。そしてなんといっても19人男だけの共同生活。想像してみてください。19人の男が並んで眠っているところを。中には「始めのうちは眠れなかった。」なんて人もいました。しかし最後には男同士仲良く「ちゃん」付けてお互いを呼び合っていました。

昼間の作業は、現場では専門用語が飛び交っていて、初めのうちはすこしとまどうこともありましたが、作業自体は単純なものばかりで、おまけに指導の先生からは「先生」と呼ばれ、失敗しても怒られることもなく、楽しく勇んでつとめることができました。

夜は毎日、おてふり、おかきさげ、おふでさきの拝読、あいさつをしてその後、なおらい。おいしいご馳走とお酒で一日の労をねぎらい、親睦を深め、次の日に備える。

感話大会にも出させてもらいました。約120人の前で10分間、自分の身上のことなどお話させてもらいました。そもそも今回ひのきしん隊に参加できたのも私が精神的な身上をいただいていたからです。

ひのきしん隊にはいろいろな事上、身上の方がおられました。足が不自由な方、痴呆がはじまっている方、幼少期に家庭内暴力をうけた方、言葉のどもり、など。そういった方々から直接お話を聞いていると、自分が助かりたいという思いはいつの間にかこの人たちを助けたいと思うようになっていました。朝づとめの後、教祖殿の一番前でおさづけを取り次がせてもらいました。

ひのきしん隊は心の修養の場であるともお聞かせいただいています。そしておぢばに伏せ込んでひのきしんに汗を流すという意味は、そのすべてを理解できなくとも、きちんと天の帳面につけられており、御守護いただけるものだと信じています。

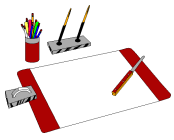
仙台分会15名、笠岡分会3名、鎮西分会1名、計19名プラス世話班2名、良き出会いと別れでした。ありがとうございました。

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介　③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

十一月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます
親神様の子供かわいい一条の慈愛溢れる親心と陽気ぐらしができるようにとの自由の御守護を賜り 日々は結構に恙なく生活させて頂いております事は誠に有難く勿体ない極みでございます しかるに 親心を知ろうとしないばかりか 御守護を当たり前と思い 喜びと感謝の心を失って心の拠り所を失い 身上事情に苦しんでいる人が多くいます事は残念でなりません
この道にお引き寄せ頂きました私共は親心を心の拠り所として 喜びと感謝の心一杯に日夜御礼申し上げると共に 御恩報じとの思いから 一人でも多くの人に親心と御守護の有難さを伝えるべくにをいがけおたすけにとたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております
その中でも今日の吉日は救けの元立てとお教え下さいましたおつとめをつとめる月毎の御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一入に 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて十一月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日を楽しみに遠近を問わず寄り集いました道の子供たちが相共にお歌を唱和し 言改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて先月ご本部の秋の大祭に合わせ別席ひのきしん団参を実施させて頂いたところ 一千三百七十八名の帰参があり 中でも初席者二十七名を含む六十九名が別席を運ばさせて頂くことができ ひのきしんも勇んでつとめさせて頂くことができました 誠に有難うございました この喜びを創立百二十周年に向けての成人の歩みに繋げて行く所存でございます また月日の経つのは早いもので気がつけば今年もあと一ヶ月余りとなりました おつとめ奉仕者増員を目標に年頭の心定め完遂を目指し 日々に真実の理を積み重ねながら本年の成人の歩みを進めて参りました 歩みが親の思いに応えられている者 そうでない者あろうかと思いますが 皆来年の歩みに繋げて行く為にも 本年残された月日 悔いの残らないよう精一杯たすけ一条の御用の上に邁進させて頂く覚悟でございます
何卒親神様には心の拠り所を失い 目先の欲得に囚われがちな世上にあって それに流される事なく むしろ救けを願い心一杯に真実を尽くす皆の誠真実をお受け取り下さいまして 万たすけの上に更なる自由の御守護と 同じく御恩報じに真実を尽くす人を弥増し下さり お望み下さる陽気づとめの世の状に一日も早くお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

こころの詩

東悠分教会　田林美智子さん

ほととぎす 狭庭に楚楚と 空郡青
更け行く秋の 静かなる 午后

ノエルの灯早ともりても人々は
寡黙に往交（ゆきか）う釣瓶おとしの霜月の暮

▼表紙の版画　東城分教会長　横山逸郎氏

▼4コマ漫画　大教会　上原元子さん

◎訂正とお詫び

『かさおか』第47巻第11号（先月号）11ページに掲載の「秋季大祭祭文」の11行目に、左記の通り脱落（赤字部分）がありましたので、ここに訂正しお詫びいたします。

”この道をお始め下された立教の元一日に当たりおぢばでは秋の大祭が執り行われますので 大祭に合わせ当笠岡におきまして別席ひのきしん団参を実施すべく募集の上にも余念はございません“

大教会だより

＝辞　令＝

立教171年9月21日付

◎創立百二十周年実行委員会

委員長　田中一之

委　員　武内　清
上原繁道
吉岡　壽
佐藤道孝
武内正美
森本忠善
上原志郎

立教171年11月21日付

◎創立百二十周年実行委員会

委　員　上原きよ代
門脇元教

◎教会長資格検定講習会修了者

前期　立教171年11月14日終講
多古浦　余村　元

後期　立教171年11月19日終講
備中　岡田玉江
真府　高田一弘

拝啓、昨今のアメリカのサブプライムローン問題に端を発した金融危機が大きな波の様に日常生活を脅かし始めた今日この頃、皆様方には穏やかに勇んでお通りの事と推察申し上げます。・・・などという書き出しにて失礼致します。

さてその様な中画期的なニュースも飛び込んできました。黒人初のアメリカ大統領誕生。勝利宣言の演説台には高層ビルからの狙撃に備えて三メートルを超える防弾ガラスで三方を囲み真に命がけの演説、やはり迫力あるものでした。”白人も、黒人も、イスパニッシュもない！あるのはただ一つのアメリカだけだ“という演説には涙する人々も多数映し出され、今後の世界の牽引者に注目せずにはおられませんね！

さてお道においても、いつの日にかご本部月次祭に、白人の本部員先生、黒人の本部員先生と、いろいろな人種の人々がこぞっておつとめをつとめられる日が来る事を楽しみにしたいものです。そして、今を歩む我々は笠岡大教会創立百二十周年に向けて親に心配をおかけしないよう、一歩一歩たゆまぬ歩みを続けさせていただきましょう。

それではこれから寒さ厳しき本格的な冬を迎えます。皆様どうぞご慈愛下さいませ。敬具　（と）